

令和元年6月11日現在

機関番号：31106

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12896

研究課題名（和文）グリーン・ツーリズムにおける効果的な日本語支援のための基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Study for Effective Japanese Language Support in Green Tourism

研究代表者

田中 真寿美（TANAKA, Masumi）

青森中央学院大学・経営法学部・講師

研究者番号：90557795

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、外国人参加者と日本人側のインターアクションが起こりやすい場面、話題、外国人参加者が理解しやすい日本人の発話と理解しにくい発話の特徴、会話の展開に寄与しない外国人参加者の発話の特徴、手伝う・指示する・感謝するなど民泊に特徴的なコミュニケーションパターンなど、グリーン・ツーリズム（以下GT）でのコミュニケーションの実態が明らかになった。また、「語学サポーター」と呼ばれる支援者の役割と、外国人参加者との相互作用も明らかになった。これらをもとに、教材・カリキュラムの作成と改善に生かすことができたとともに、「日本語コミュニケーション」が観光資源としての価値を持つということを主張できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により得られた成果は、観光接触場面やホームステイ場面にも応用できるという点で発展性がある。また、本研究では、外国人参加者にとってのGTの魅力が農業体験のみならず、農業体験や農家民泊を通じて、「そこに住む日本人と日本語でコミュニケーションし、互いの文化について理解を深められる」点であることを明らかにし、日本語コミュニケーションに観光資源としての価値を見出したという点で新規性がある。さらに、このような価値をGTに関わる地域の様々な主体と共有し、本研究により得られた知見を活かして質の高いGT・民泊プログラムを継続的に提供できれば、地域振興にもつながるという点で、大きな意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：The findings from this study are the actual conditions of communication in green tourism(hereinafter referred to as GT) including characteristics of situations and conversation topics that tend to take place of interactions between foreign and Japanese participants and speech of Japanese participants that is easily understood by foreign participants and speech that is difficult to be understood, characteristics of speech of foreign participants that does not contribute to the development of a conversation, and the signature communication patterns in private residences temporarily taking lodgers such as helping, instructing, and thanking. Furthermore, the role of supporters referred to as “language supporters” and interaction with foreign participants also became evident. This could claim that “Japanese language communication” possesses value as a resource for tourism along with being able to apply it to the preparation and improvement of teaching materials and curriculum.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 グリーン・ツーリズム 異文化理解 民泊 地域振興

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日本におけるGTは、都市・農村交流の一形態として始まり、想定参加者は国内の都市の住民であった。外国人が対象となったのは近年で、外国人参加のGTについて、ターゲットにどこの国・地域を狙うべきかといったマーケティングの視点からのものはあるが、日本語教育や異文化コミュニケーションの視点で行われた研究は少ない。

研究代表者勤務校にはアジアから地域への観光客の誘致推進を目的とする協議会の事務局が置かれており、その協議会を通して海外からの教育旅行生を受け入れている。旅行生が体験するGTには勤務校の留学生が「語学サポーター」として同行しており、その旅行生の短期集中日本語教育を研究代表者らが担当していた。研究代表者は、語学サポーターである留学生・GT参加者である旅行生両者への日本語教育を担当しているが、以下のような疑問を持つようになった。GTへの同行は、留学生にとり地域・農村文化を理解する、また、日本語を教室外で活用する貴重な機会となっているが、通訳という役割で臨むGTで、地域・農村文化との接触、あるいは、コミュニケーションの上で困難を感じる点はないのか。サポーター以外にも、受け入れ農家、仲介者などGTの関係者、参加者である旅行生はどうか。また、日本文化・異文化理解、基礎的な日本語コミュニケーションの実践など、GTの場面を想定して旅行生に対して行った短期日本語教育の内容は、適切だったのか。

外国人を対象としたGTに関し、外国人参加者と農業従事者の言語行動を分析したものはあるが(市嶋典子2014「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察」秋田大学国際交流センター紀要3)、それにおいても、異文化コミュニケーションを促進するために、日本語教育者やその他のGT各主体(外国人参加者、受け入れ農家、行政など)がどのような役割を果たすべきか明らかになっていない。また、GTのプログラムの充実のために必要な、各主体の目的や主体間の相互作用を分析したものはない。

研究代表者らは、まず、青森県におけるGTを理解するため、2014年11月に行政・受け入れ農家・仲介者・在住外国人をパネラーにパネルディスカッションを開催し、GTにおける各主体が感じる課題の把握に着手した。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、GTで訪れる外国人・受け入れた日本の住民双方が満足し、異文化理解が促される効果的な日本語支援のあり方を考察するものである。そのため、具体的には以下の達成を目指す。

- (1) GTの現場でのコミュニケーションの実態を明らかにすること。
- (2) GTの各主体(外国人参加者、受け入れ農家、行政、サポーター、日本語支援者等)の役割や目的、主体間の相互作用を異文化間コミュニケーションの視点から明らかにすること。
- (3) 地域やプログラム内容が異なっても、その地域の日本語支援者自身で応用可能な教材や授業カリキュラムを開発すること。

3. 研究の方法

上記(1)(2)のため、文献調査、GT各主体への聞き取り調査、青森県内でのGTで、外国人参加者と受け入れ先の日本人とのコミュニケーションの録画・録音データの取得・分析を実施した。

上記(3)のため、日本語教材を試作・試行・改善を繰り返した。

4. 研究成果

本研究により明らかになったことを以下にまとめる。

- (1) グリーン・ツーリズムでのコミュニケーションの実態

外国人参加者と日本人側のインターアクションが起りやすい場面と話題

インターアクションが起りやすいのは農作業体験前後の家屋内や夕食時で、日本語力が低くても、参加学生と受け入れ家族との間には情報のやり取り以外のインターアクションが生じることがわかった。また、参加学生と受け入れ家族の間では、主に「民泊や農作業に関連すること」、受け入れ家族・参加者の「個人的なこと」、「タイについて」の3つの話題が出ており、リンゴの栽培方法やタイについてなど抽象度の高い話題も提起されていたことがわかった(表1)。

表1 農家民泊で家族と話した話題

民泊や農作業に関連すること ・作った料理の材料 ・リンゴ農園や農家の生活 ・リンゴの栽培方法
個人的なこと ・ホスト家族について ・お父さんとお母さんの恋愛 ・学生の将来のこと ・学生の好きな食べ物 ・学生のタイでの生活
タイについて ・タイの農業について ・タイ人の日常生活 ・音楽 ・料理、コメ、観光地、文化の日タイ比較

農業体験活動における留学生と引率教師、農業従事者の相互作用を分析した市嶋(2014)では、抽象的な話題が会話の維持を難しくすると判断された場合、身近で「今、ここ」に当たる話題が日本人側により選択されるとしている。これと比較すると、通訳などを担う「語学サポーター」が適宜介入するGTでは、「語学サポーター」の存在が受け入れ農家・参加学生双方の話題の選択に対する制約を弱めるものと思われる。

手伝う・指示する・感謝するなどGTに特徴的なコミュニケーションパターン

本研究のデータでは、ゲストである参加学生が「手伝いを申し出」たり、ホストである受け入れ家族が「手伝いを指示」し、「ゲストの手伝いに対して感謝」したりするといった場面が見られた(表2)。このようなコミュニケーションは「一人一人の横の関係を基礎とした、わかりやすく、より親密度の高い日本語使用のあり方」(加藤 2014)とも捉えられる。このような親密なコミュニケーションは、加藤(2014)が観光接触場面でホスト側が新たな「オモテナシ」として今後認識する必要があるとしており、GTにおいても意義を再確認できる。

表2 手伝い申し出・感謝場面

学生(夕食準備中、仏壇にもお酒を備えようとして)「すみません、お酒は？」 母「あ、ごめんなさいね。気を遣ってもらって。すごい。仏様の。昨日の覚えてたんだ。仏様の分。え〜すごいね〜。」 女性「すごいね〜。気を遣ってもらってありがとう。」
学生「ごちそう様でした」学生「おなかいっぱい」学生が食器を片付け始める。 母「すごいよかった片付けして」「上手」「助かっちゃうね」

外国人参加者が理解しやすい日本人の発話と理解しにくい発話の特徴

手伝い指示場面で、受け入れ家族の平易な発話や繰り返し、身振りにより、参加学生の指示の理解度が上がる一方、馴染みのない日本の社会文化知識については、より具体的な指示がなければ参加学生は期待された行動が取れないことがわかった。以下表3の「(瓶は)そっち」と方向だけ示されたことで、「瓶は資源として分け、この家の場合はごみ箱に入れる」という行動を学生が取れなかった例である。

表3 手伝い指示場面の受け入れ家族の指示の仕方

わかりやすい指示 母「はい、じゃあこれお盆に入れて。じゃあお願いします。これこれのお父さんの分」
わかりやすい指示+繰り返し 母「じゃあこれも肉こう、持ってよそってもらえますか。そうそう。食べる分だけ。食べる分。食べ

れる分。」
身振りを付ける 母「いいよいよそれは。すすぐだけで。すすぐだけで。(身振り)」
具体的な指示なし 母「あ、それだけジュース余ったの(学生「はい」)。瓶は <u>そっち</u> 」 学生は空瓶を持ってゴミ箱の方に歩いていくが、どうすればいいかわからず、うろろしている。

会話の展開に寄与しない外国人参加者の発話の特徴

本研究のデータでは、語学サポーターを介して、受け入れ農家側は参加学生個人やその母国の事情・状況に関する質問がなされていた。語学サポーターの存在が日本人側の積極的な異文化理解につながっていたと言える一方、参加学生からは質問についての短い返答があるだけで、家族側に問いかけ返すことはなく、それ以上会話が展開していかない例が見られた(表4)。

表4 タイ人参加者個人に関する質問と応答

父「P、タイ以外で、どの国が、世界の国でどの国が、好きですか」 サポーター(タイ語で訳した後) 「行ったことがないですから、今回は海外は初めてなので、ただ好きだけで言って、挙げます」 父「言って。好き、好き、好きだけでいい。アメリカ? フランス? イギリス?」 学生P(サポーターの訳を聞いた後)「Switzerland」 父「B?」 学生B(サポーターとタイ語でやり取りした後)「France」
--

(2) 「語学サポーター」と呼ばれる支援者の通訳以外の役割と外国人参加者との相互作用

語学サポーターは、参加学生が日本語使用の能力や希望があるとわかる場合に日本語使用の促しを行っていたことがわかった。この場合、勇気づけの言葉をかけるなどし、間違いを犯すことへの不安を減じさせる配慮を行ったり、質問によっては通訳せず、参加者に質問させたりする形を取っていた。また、日本の生活ルールなど社会文化知識の提供を行うなど、異文化理解の促進を行うこともわかった。しかし、サポーター自身の社会文化知識の不足や参加者との年齢の近さなどの理由により、参加者の疑問が解消されなかったり、生じた誤解を解くことができなかつたりすることも起こることがわかった。

(3) 教材・カリキュラムの作成と改善

上記4(1)より、GT前の日本語授業においても、情報のやり取りにとどまらず、身近な話題でのコミュニケーションを想定して準備する必要があることがわかった。そこで、作成教材には、自分と身近な人・ものに関するトピックシラバス(自己紹介、趣味、好きなもの、将来の希望、食べ物)と、家の中を想定した場面シラバスを採用することにした。また、基本的・日常的な語彙(例: ふきん、洗面所)や表現(例: お手伝いしましょうか、～は足りていますか)の練習が増強された。

上記4(1)及びから、GTにおいてさらにコミュニケーション量を増やし、双方向の異文化理解につなげるために、GTでよく出されるトピック(自国の食生活、観光地情報、日本文化の流入状況など)について、事前に参加学生に簡単な日本語で「新聞」風にまとめさせ、GTでの団らん時に見ながら話題にするというタスクを取り入れた。これにより、参加学生は母国に関する基本的情報や日本語の語彙を事前に確認できるとともに、日本ではどうなのかという相対化の視点や農家側に問いかけるきっかけを持ちうる。農家側にとっても、異文化への関心がより深まる契機となりうる。

上記4(1)から、参加学生に対して、コミュニケーションをできるだけ長く持続・展開させるためのストラテジーを指導することも必要であることがわかった。GT前の事前の日本語授

業では、語彙や表現、聞き返しなど、参加者側が「日本語を理解する・話す」ことを重視した指導が行われていたが、会話の相手がどのように思うかを聞き、相手への関心を示すといった、コミュニケーションを継続・展開させるための態度を養う指導も必要である。例えば、受け入れ家族に母国や自分の状況について質問された時、「質問 - 回答」のワンペアで会話を終了させるのではなく、「日本ではどうですか?」「お母さんはどうですか?」と同じ質問をすることができれば、日本語が初級レベルであっても、より達成感を得られるコミュニケーションが可能になると考えられる。様々な属性・日本語レベルの外国人の参加が想定される GT では、留意すべきことであろう。

上記 4 (2) から、異文化における経験や考え、留意したこと(疑問や誤解を含む)を、参加学生と語学サポーターは共に振り返る機会を持つことが必要であるとわかった。同じグループだけでなく他の学生、他の語学サポーターと共有することで、体験を様々な視点から解釈し、自分の認識を相対化できるように、GT の後に振り返りの時間を設けることにした。

(4) 「日本語コミュニケーション」の観光資源としての価値づけ

受け入れ家庭との日本語によるコミュニケーションとそれを促す日本語教育が GT 体験と有機的につながることで、参加者の満足感を高めることができる。リピーターの多い GT は地域振興にもつながるので、持続的に発展させるためには、「日本語によるコミュニケーション自体が観光資源としての価値がある」という視点を持ち、異文化理解を促進するようなコミュニケーションを提供し、プログラムの質を高める必要がある。そのためには、外国人には何がわかりづらいのかといったことについて、受け入れ家庭側にも知らせることが必要であるとわかった。また、「日本語コミュニケーション」の観光資源としての価値を GT に関わる様々な主体で共有することが必要であるという論考に至った。

引用文献

市嶋典子(2014)「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察 農業体験活動における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』3号、1-13

加藤好崇(2014)「観光立国を目指す日本のツーリスト・トーク再考 - 和式旅館における観光接触場面 - 」『東海大学大学院日本語教育学論集』1(1)、1-18

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

佐藤 香織、田中 真寿美(2019)「観光資源としての日本語コミュニケーションの可能性と課題 - グリーン・ツーリズムによる地域振興を持続的に行うために - 」『言語政策』第15号(査読有) pp.131 - 143

田中 真寿美、佐藤 香織(2017)「日本語学習のさらなる動機づけにつながる短期留学プログラムを目指して - 「泰日工業大学日本語サマーキャンプ」の歩みと課題 - 」『青森中央学院大学研究紀要』第27号(査読有) pp.83 - 97

〔学会発表〕(計3件)

佐藤 香織、田中 真寿美(2017)「農家民泊における外国人参加者と農家間のコミュニケーションのための日本語支援の在り方」、日本語教育学会2017年度第8回支部集会、東北大学、2017年12月10日

田中 真寿美、佐藤 香織(2017)「短期留学プログラムにおける送り出し機関と受け入れ機

関の連携の在り方 - 学生の意欲的・主体的参加を目指して - 」、タイ国日本語教育研究会第
29 回年次セミナー、国際交流基金バンコク日本文化センター、2017 年 3 月 18 日
田中 真寿美、佐藤 香織 (2015)「農家民泊での異文化コミュニケーションにおける語
学サポーターの役割」、日本語教育学会第 8 回東北地区研究集会、秋田大学、2015 年 11
月 21 日

〔その他〕

ホームページ等

日本語学習支援ネットワーク会議 2014 in 青森 報告書

http://www.aomoricgu.ac.jp/communications_and_extension/cooperation/jlsnm2014/

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐藤 香織

ローマ字氏名：Kaori SATO

所属研究機関名：北海道教育大学

部局名：教育学部

職名：講師

研究者番号 (8 桁) : 40400618

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実
施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する
見解や責任は、研究者個人に帰属されます。